

# 東海の古代

## 第269号 2023年1月

会長 : 畑田寿一  
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp  
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

### 2023年年頭にあたって

一宮市 畑田 寿一

明けましておめでとうございます。会員の皆様には健やかなお正月をお迎えされたこととお慶び申し上げます。

今年法隆寺の釈迦三尊像が造られてから1400年になります。この像については上宮法皇などの記述から7世紀後半とする説が有力でしたが、台座の墨書きなどから7世紀前半に遡る可能性が浮上して来ています。古代史に於いては年代が確定できることは稀れで、複数の説が存在することが多いのですが、古田武彦氏は複眼的視点で歴史を眺めて、より良い解を探す努力を提唱されてきました。

木簡やX線解析装置の登場により、古代史の世界も近年20年間で大きく様変りました。我々が提唱する九州王朝説も例外ではありません。新しい情報を吸収しながら絶えず自説を見直す努力が求められています。しかし、我々は往々にして自己の説に拘り、他人の説を軽んじてしまい勝ちです。今年も皆さんの活発な論議を期待しています。

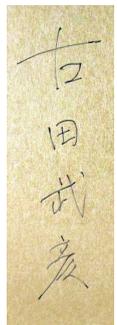
### 三角縁神獸鏡の時代

名古屋市 石田 泉城

#### 1 はじめに

「古代史セミナー2022」において、荻上紘一実行委員長は、〇〇史観に基づく史実などはありません、史実（客観的）が先で、史観（主観的）は後であり、「〇〇説だから」は根拠にはならない。エビデンスが重要であり研究の業績を積み上げてほしいと総括されました。

また、先師・古田武彦は、「論理の導くところに行こうではないか。たとえそれが何処に到ろうとも」を座右の銘として、根拠となる資料を緻密に探り客観的に論理を展開することに徹しました。それこそが史実に迫る研究方法であると私は思います。



#### 2 邪馬壹國の表記

さて、歴史文化ライブラリー66『三角縁神獸鏡の時代』（岡村秀典、吉川弘文館、1999年）をもとに、卑弥呼の時代のことに触れます。

まず、1ページの1行目の記述から気になります。『魏志』倭人伝に記されているとしながら当たり前のように「邪馬<sup>やまたいこく</sup>台国」と書かれています。

いまをさかのぼる一八〇〇年前の日本列島について記録した『魏志』倭人伝。そこには倭王卑弥呼を戴く邪馬台国があり・・・

古代史に関心のある方なら誰でも知っているように、『魏志』倭人伝には、「邪馬台国」とは記されておらず、これは誤った表記です。「邪馬壹国」が正しいです。

私としては、正しい表記である「邪馬壹国」と書くべきと思っています。いくら「邪馬台国」が通説になっていようとも、専門家なので『魏志』倭人伝に記述されていると書くのであれば、文字はその史料にあるとおりに忠実に記すべきです。

それでも「邪馬台国」と書きたいのなら、たとえば、「邪馬壹國（通説に従い以下邪馬台国と表記する）」などと注釈すべきでしょう。これまで、こうした専門家によるさまざまな表記が古代史を誤らせてきた原因なので、しっかり指摘しておきたいです。

岡村秀典は、西谷正や岡崎敬と同じく邪馬壹国畿内説を提唱する伝統がある京都大学出身の考古学者であり、三角縁神獣鏡が邪馬壹国向けに魏で特別に作られた鏡であるという考えです。ですから、邪馬壹国をヤマトに結びつけたいが為に、何のコメントもせず自然のごとく「邪馬台国」と記しているのでしょう。

### 3 須玖岡本遺跡

次に気になったのが、小見出し「須玖岡本遺跡」に記した内容です。

奴国の所在した福岡平野のほぼ中央、春日丘陵の先端にある春日市須玖岡本遺跡では、

何のことわりもなく、奴國は福岡平野にあったという前提で記されます。ここの記述についても気になります。

昔々、博多湾の港を「那の津」と呼んだから、このあたりは「那」であったはずなので奴國は、この港があったところだとして、福岡平野を奴國とした説が一般化しました。

現在も福岡市中央区の埠頭の辺りは、那の津1丁目～5丁目の地名になっています。ただし、ここは3世紀には海の底であって、厳密には当時の津ではあり得ない場所です。

この「那の津＝奴國説」の提唱は、三宅米吉（元考古学会会長、1860年生）で、「奴」は「灘津」や那珂川の「な」で、那珂川を中心とする地域に奴國を比定しました。これが通説となった大元と思われます。

ところで、ここでよく考えてみると、いくつか疑問が生まれます。

まず、①『魏志』倭人伝の時代、2, 3世紀に博多湾を「那の津」と呼んだ証拠はあるのかどうか。

また、②「奴」を「な」と読む証拠はどこにあるのか。

さらに、③博多湾が「な」であったとしても内陸地までも「な」の地名といえるかどうか。

①については、私が知る限り、その証拠はないようです。三宅米吉の言う「灘津」や「那珂川」の名称はいつの時代からのものなのか、三宅も根拠を示していないようです。だいたい「那珂」は「中」のことですので、それを「なか」の頭の「な」だけを取り出すのはこじつけのように思います。「那珂川」は、栃木県にもあります。この栃木の「那珂」の由来は諸説ありますが一般的には、常陸国の真ん中を流れる川であるので、中央の川という意味で「なか」川と呼ばれているとされます。栃木の「那珂川」は、『白河紀行』（宗祇、1468年）では「中川」の字をあてています。

こうしたことから、三宅米吉の「那の津＝奴國説」は、決して根拠にはならないと考えますが、岡村はあたまから奴國は福岡平野にあったと決めてかかっています。

②についても、私は証拠がないと思います。私は「奴」を「な」と読むような証拠に出

会ったことがありません。

果たして「奴」を「な」と読むでしょうか。漢字の読みが記される最も古い現存の文献は『万葉集』であり、その『万葉集』の第一巻から第二十巻のすべてで「奴」は「ぬ」と読まれています。「な」と読んだ例は1件も無いのです。

これで「奴」を「な」と読めると強弁するのであれば、これ以上の決定的な証拠を出す必要があるでしょう。

③の内陸部が「な」という場所であったかどうかは、もっと不確かです。万一、「奴」が「な」と読めたとしたら、少なくとも須玖岡本のあたりに、その「な」に関わりそうな地名があると示さなければならぬと私は思います。

『三角縁神獣鏡の時代』を批評し始めると、根源的な話について多くの疑問が解消されていないことに気がつきます。

#### 4 早良平野の遺跡

岡本が描いている「三角縁神獣鏡の時代」とは「卑弥呼の時代」のことですが、最も怪訝に感じたのは、卑弥呼の時代の早良平野の遺跡についてほとんど記されていないことです。たとえば、吉武遺跡群を考えると、ここは弥生前期～中期の遺跡であって、三角縁神獣鏡の出土がありませんから岡村が取りあげなかったのは当たり前かもしれません。

しかし、吉武遺跡群の王権を引き継ぐ卑弥呼の時代の遺跡が早良平野にもあります。文中には、早良平野にある吉武遺跡群の一部である樋渡古墳の名称はでてきますし、吉武遺跡群の南方に近接する東入部遺跡についても記述がありますが、早良平野では多鈕細紋鏡など「三種の神器」が副葬された王墓を有する吉武遺跡群と、それを引き継ぐ獣帯鏡・鉄刀・勾玉を出土した王墓を有する野方遺跡が書かれていないのは、いかにもバランスに欠けます。

というのも、『三角縁神獣鏡の時代』では、漢鏡のみ出土し三角縁神獣鏡が出土しない、遠賀川流域の立岩遺跡や筑前・朝倉の東小田峰遺跡、唐津平野の桜馬場遺跡については、各遺跡ごとに小見出しをつけて取りあげているのです。

野方遺跡は、三雲南小路遺跡や須玖高木遺跡などと同じく、弥生時代後期から古墳時代にかけての、いわゆる卑弥呼の時代の遺跡ですから、対比させなければならぬでしょう。野方遺跡は、大小2つの環濠集落や古墳時代に300基以上の住居が造られたとされており、鏡・玉・剣を有する王墓もあるので倭人伝の国であるのは間違いなく、大いに注目されます。周囲には卑弥呼の時代の住居遺跡などがいくつかあります。一般的な常識では早良平野が奴國である可能性を思い浮かべるでしょう。岡村は、なぜか、野方遺跡を始めとする早良平野について故意に避けているようです。

早良平野を奴國と認めれば、自ずから福岡平野は奴國ではなくなり、福岡平野は邪馬壹國の可能性が大きくなりますので、早良平野の遺跡について記述しないのではないかと思えてなりません。福岡市教育委員会も「やよいの風丘公園」と名付けるしかないでしょう。

#### 5 奴國の所在

あらためて『魏志』倭人伝の行程に沿って、奴國の位置を探ります。

##### (1) 一大國から末廬國

一大國を代表する遺跡は、壱岐の「原の辻遺跡」です。ここは国の特別史跡として唯一倭人伝の国として認められています。この一大國から「南千里」（短里で約76kmとする）で末廬國です。

実際の方角は、壱岐から唐津まで地図を見ればわかるとおり、南から45度ほど南東方向にずれており、以下の国々の行程も、実際の方角よりこれくらいの角度がずれていること

を理解し、『魏志』倭人伝の著者、陳寿の記す方角のずれを加味する必要があります。

沓岐から唐津までの実際の距離は約52kmです。倭人伝のおよそ7割の距離ですが実際の水行の行路がわかりませんし、距離の桁が違うわけではないので、1800年前のアバウトな認識であることを鑑みれば、およそ合致していると考えてよいでしょう。

## (2) 末廬國から伊都國

末廬國は、松浦半島に位置する菜畑遺跡、宇木汲田（うきくんでん）遺跡、桜馬場遺跡などがある唐津平野とされます。桜馬場遺跡については、この本でも触れられており、弥生後期の墳丘墓で甕棺から後漢鏡2面、鉄刀片1個、ガラス小玉1個、などが出土しています。

また、伊都國は、平原遺跡、三雲・井原遺跡の三雲南小路遺跡、井原鍮溝遺跡などがある糸島平野であり、これらの遺跡については、すべてこの本で触れられています。

末廬國から「東南五百里」（短里で約38km）で伊都國です。実際の方角は、先述した陳寿の認識で、およそ東の方角にずれています。

末廬國には、王墓がある弥生中期の宇木汲田遺跡があり、これに繋がる弥生後期の桜馬場遺跡から、伊都國の王墓を有する三雲南小路遺跡までの距離は、34km程度です。

倭人伝の記述する距離の約9割の距離で、およそ合致しています。

ここで注意すべきは、この伊都國までの国の比定について、多くの学者の考えが一致しているところであり、とりもなおさず、それは距離と方角について多くの学者が承知されていることとなります。すなわち、距離は「短里で1里=76mほど」であり、方角は実際の「南東」を倭人伝では「南」と記すように、方角がズレていることを多くの学者は認めているのです。

そこで、伊都國の後の行程も同じように考えて国々を探り比定します。

## (3) 伊都國から奴國

伊都國から「東南百里」（短里で約8km）で奴國です。

通説では、この奴國を福岡平野にあるとしますが、倭人伝の距離と全くあいません。

伊都國の三雲南小路遺跡から通説の奴國、すなわち福岡平野の須玖岡本遺跡まで26kmほどの距離です。

倭人伝の約8kmに比べて、26kmでは遠すぎるのです。（直線距離でも20km以上）

方角と距離からすれば、奴國と比定されるのは、福岡平野ではなく、早良平野です。

伊都國から早良平野への実際の方角は、これまでの行程と同じように、倭人伝に記される「南東」から北方向へずれておよそ「東」の方角になります。

伊都國の王墓とされる三雲南小路遺跡や平原遺跡から早良平野の野方遺跡まで、すなわち伊都國から奴國までの距離は約11km～12km（直線距離では7km）です。

倭人伝が示す距離とせいぜい数キロしか違いませぬので、奴國が早良平野の野方遺跡であるとすれば、方角も距離も妥当と言えましょう。

少なくとも糸島平野から福岡平野までと比べれば、合致しているほうだといえます。

野方遺跡は、鏡・剣・玉の「三種の神器」を有する紀元前2世紀頃の吉武遺跡群を引き継ぐ卑弥呼の時代の遺跡で、獣帯鏡、勾玉、太刀などが出土する王墓と考えられる石棺墓などを集中させた墓域があり、奴國を代表する遺跡として相応しいです。

早良平野には野方中原遺跡、野方久保遺跡のほか、湯納遺跡、官の前遺跡、拾六町ツイジ遺跡など弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡や墳墓、水田の遺跡があります。

末廬國から伊都國までの「五百里」（短里で約38km）と伊都國から奴國までの「百里」（短里で約8km）を対比させれば、奴國が早良平野に位置することは一目瞭然です。

#### (4) 奴國から不彌國

奴國から不彌國まで「東百里」(短里で約8 km)です。

実際の方角は、これまでと同様にずれており、およそ北東の方角です。

早良平野の野方遺跡から私が不彌國と想定する雀居遺跡までの距離は約11kmです。雀居遺跡からは、紀元後2～3世紀の杉板の文机と墨書土器「天」が出土しています。まさに文書をしたためる文の国、不彌國に相応しいです。

そして、邪馬壹國は、その雀居遺跡の不彌國に南接しており、邪馬壹國內にあって、青銅器製造の中心地が須玖岡本遺跡とします。

このように方角も距離も『魏志』倭人伝の奴國にほぼ合致するのは、早良平野ということになります。我田引水をしているのではなく、伊都國までの認識、距離は短里であって、方角は同じ方向にずれているという記述を理解し、そのまま伊都國以降の行程にあてはめることにより、自然と導き出された結果です。



#### 6 早良平野の「ぬ」

早良平野が「ぬ」と呼ばれる裏付けに、一応、触れておきます。

『和名類聚抄』によれば、現在の福岡市西区野方付近は、額田という地名でした。

つまり、早良郡野方は、以前には早良郡額田だったのです。この額田の「ぬ」は、「那の津」の「な」に比べれば、奴國の確かな発音に通じるもので、卑弥呼の時代の「奴」の国を示唆するものです。

額田は「ぬかるんだ田んぼ」を意味しており、田に適した土地です。「ぬかるんだ」国だから「奴國」ではないかと思えます。早良平野からは、卑弥呼の時代の水田址、湯納遺跡・原談儀遺跡群・鶴町遺跡・四箇遺跡群の4遺跡が発見されています。

また、野方中原遺跡からはイネのプラントオパールが採取されています。

この野方中原遺跡は、「三種の神器」が出土した弥生時代の王墓がある吉武高木遺跡などを引き継いだ卑弥呼の時代の王墓を有する遺跡で現在確認出来る王墓の一つが野方中原遺跡の1号石棺墓です。王墓が集まった墓域の中には、盗掘されている4号石棺墓、6号石棺墓、残材のみの7号石棺墓や未発掘の8号石棺墓、10号石棺墓、木棺墓などがあり、1号石棺墓よりかなり大きい4号石棺墓、6号石棺墓が盗掘されていなければ豪華な副葬品があったと思われます。

## 7 まとめ

早良平野を奴國と仮定すると、第1点に、ここまで示してきたように、国から国までの距離・方角が示されている『魏志』倭人伝の距離や方角にほぼ合致します。これに対して福岡平野を奴國とする通説では、距離も方角も大きく逸脱する説となり、仮説として成立しません。

第2点に、早良平野には、「三種の神器」（鏡、劍、玉）に相当する出土物を副葬する王墓とみられる卑弥呼の時代の野方遺跡があります。

第3点は、唐津平野、糸島平野、早良平野、福岡平野にはそれぞれ稲作遺跡があり、国としての成立しうる食糧基盤があります。唐津には菜畑遺跡、糸島には曲り田遺跡、早良には湯納遺跡・原談儀遺跡群・鶴町遺跡・四箇遺跡群の4遺跡、福岡には雀居遺跡、板付遺跡です。

岡村秀典は、『三角縁神獣鏡の時代』において、早良平野を飛ばして、通説と同じく福岡平野が奴國であると前提して記述されます。しかし、論理的に考えれば、奴國は福岡平野にはありえず、早良平野が妥当と考えます。

# 脱活乾漆像と塑像の考察から見た東アジア I

刈谷市 酒井 誠

## 1 はじめに

私たちは日本文化の形成の道筋を研究するために、古代金属器（鉄文化、青銅文化）や土器（弥生式土器、陶質土器、須恵器、土師器）などの調査をしてきた。そこで朝鮮半島と日本列島の文化や出土品を対比することで、東シナ海周辺が、やがて韓国・朝鮮文化や倭文化の両者の源として発展する「プレ朝鮮・倭文化」の発祥の地であるという仮説に至った。今まで多くの学者が弥生文化という抽象的でつかみどころのない曖昧な文化を持ち出して説明を繰り返したが、弥生人そのものの存在の説明は曖昧であった。弥生人とは、東シナ海周辺に住んで、大陸文化を吸収して、大陸人と混血した縄文人だ。

仏像文化の先駆けとして、広隆寺の「二体の弥勒菩薩半跏思惟像の出自」を、特に「宝冠弥勒」を中心に考察したが、材質、彫刻技術を見ても国内で作られたものであるという結論に達した。6, 7世紀には韓半島においても木造の半跏思惟像が存在したであろうことは推察できるが、その後長期にわたる儒教思想の中で、強烈な廃仏毀釈が行われ、ほとんどの仏像が破却されたことは残念でならない。その後7世紀後半より日本や朝鮮半島では、脱活乾漆像が造られた。しかし、朝鮮半島では、乾漆像は1体も現存しない。ただ、漆で作られた古代の韓半島製品はわずかばかりであるが残っているので、それを手掛かりとして、日本列島製品との比較研究をして行きたい。

今後は、漆文化の広がりを見ながら、平安時代初期には作られなくなった「脱活乾漆像」と「塑像」の東アジア内における隆盛と伝播を考察してみたい。

研究対象として訪れた寺院は、「脱活乾漆像」「塑像」の日本最古の仏像が安置されている「當麻寺」と数々のこうした技法によって造られた仏像の多い「興福寺」「東大寺」に絞った。すべての寺院において堂内では撮影禁止であったことは残念である。

## 2 當麻寺・金堂内の仏像

當麻寺は、伝説の豊富な寺で、創建の時代背景を探ることは難しい。聖徳太子の義兄弟の創建の話もあるが、そこまで下る証拠はない。當麻寺も興福寺も平重衡の南都焼き討ちにあって多くの収蔵品が破壊された。金堂内に残された金堂の本尊である弥勒菩薩座像（日本最古の塑像・国宝）と四天王立像（日本最古の脱活乾漆像）は、白鳳時代に作られたも

のである。この場所は、壬申の乱でも重要な位置にあって、その乱で活躍した當麻氏によって創建された説もある。文献上では、天武天皇によって7世紀後半の687年にこの寺で法要がされたとある。



### 3 興福寺・国宝館と阿修羅像

現在の国宝館のある場所は、食堂の跡地である。興福寺の歴史を探るうえで重要な仏像彫刻、絵画、工芸品、古文書などが収蔵されている。その中心が乾漆八部衆像や乾漆十大弟子像である。とりわけ有名な像が、「阿修羅像」である。



興福寺の西金堂跡地



阿修羅像



沙羯羅像（さからぞう）



五部浄像（上半身）

興福寺は、南都七大寺の一つで、藤原氏の氏寺である。藤原鎌足のために夫人の鏡王女が夫の病氣平癒を願って669年に山背国山階（今の山科）に創建した山階寺が始まりである。その後672年に藤原京に遷り、厩坂寺と称した。710年平城京遷都で現在地に移転し、興福寺となった。710年が創建である。脱活乾漆像は、聖武天皇の皇后の藤原不比等の娘

である光明子が、母である県犬養橘三千代の供養のために作った興福寺西金堂に734年に奉納されたものである。阿修羅像は、153cm15kgで、焼き討ちの際にも持ち出すことができた。五部浄像は、その際に下半身が失われた。しかし、この像が残ったおかげで、脱活乾漆像の内部の作りがわかって、漆や麻布や粘土で作られ、内部の余分な粘土は背部から取り除かれたことがわかった。作成したのは渡来人の「將軍万福」と記録にはある。

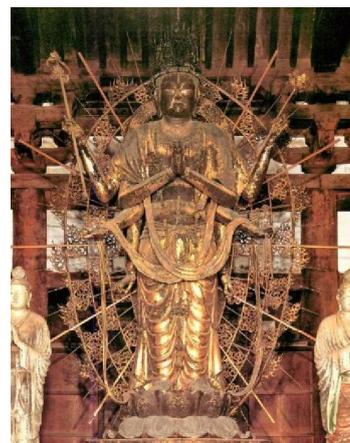
ここで阿修羅像のモデルになったのは誰かということが問題になるが、近年は幼くして亡くなった聖武天皇（光明子）の息子の基親王との意見がある。私はやはり光明皇后であると思っている。阿修羅像は、釈迦を守る戦闘の神である。それをこのようにやさしい阿修羅像にしたのは、光明子の母親に対する愛情の表れだと思う。母が亡くなった後まで気持ちとしては寄り添いたいという娘の思いのこもった像である。もし、息子の基親王であるとするならば、東大寺にその遺影を偲んだ像を作るべきで、興福寺にはありえない。

### 3 東大寺・三月堂と不空羂索観音像

聖武天皇は、幼い時から病弱で、精神的にも問題があったようである。母親の藤原宮子は、やはり不比等の娘であり、若くして亡くなった文武天皇の妃である。聖武天皇が誕生してから36年間も鬱気味で、息子に会えなかった話は有名である。聖武天皇も世間的には、仏教を広めて寛大な天皇のように聞こえているが、多くの遷都を繰り返して、庶民には甚大な犠牲を強いた。確かにこの時代は不安定な時代で、藤原不比等の死、『日本書紀』完成720年、聖武天皇即位724年、基親王の死728年、長屋王の変729年、天然痘などの病気も蔓延して、藤原四兄弟の死737年と続き、天皇の精神状態も不調で、743年には東大寺の建立のスタートにこぎつけた。



東大寺三月堂・法華堂（平山郁夫作）



不空羂索観音像（乾漆像）

東大寺の南大門の東あたりに東大寺の前進となる「金鐘寺」なる寺があつて、その際に宇佐八幡宮を勧請して、「手向山八幡宮」も創建した。この寺を母体として東大寺の創建が計画された。その「金鐘寺」の本堂が、現在の三月堂である。近年になって二月堂左奥の箇所より、さらに古い時代の遺跡が発掘されている。728年に基親王がなくなった折に、733年に創建されたのが金鐘寺で、その寺に9人の僧侶を住まわせて、菩提を弔った。その中に良弁の名前もあって、733年以降に三月堂の本尊である乾漆像「不空羂索観音像」も作られたようである。これは、興福寺の阿修羅像が造られた時期と一致する。

二月堂、三月堂ともに正面は金鐘寺創建当時の様子を残し、南向きで、特に三月堂は異形をしている。右側の部分が戦火で焼失したため、仏像はかろうじて残った。尚、本堂内の本尊の背面には、乾漆像の「執金剛神立像」があるが、12月16日しか公開されない。

二月堂を見ると、寺のお金集めの部分が見えてしまう。毎年お寺に高額の寄進をした人の名前が呼ばれ、寺の周りには寄進者の石柱が並んでいる。二月堂はお水取りで有名であ

るが、その水は「若狭井」といって、福井県より流れてきていることになっている。一月堂はどこにあるのか？



二月堂と良弁杉



二月堂の寄進者1億円

今回は、「脱活乾漆像と塑像の考察から見た東アジアⅡ」として、漆文化を細かく見てゆきます。

## 法隆寺釈迦三尊像光背銘の不思議

東海市 大島 秀雄

### 1. はじめに

法隆寺金堂の釈迦三尊像光背の裏に記されている銘文の末尾には「**使司馬鞍首止利佛師造**」となっており、一般には「**司馬鞍首止利仏師**<sup>しめのくらのおびととり</sup>をして造らしむ。」と読まれています、「司馬鞍」とは不思議なウジ（氏）なので真相を探ってみたい。

### 2. 司馬鞍首止利とは何者か

鞍部（作）氏については、『日本書紀』の敏達紀から推古紀までで、鞍部村主司馬達等－鞍部多須奈－鞍作鳥の祖父、父、子の三代の名前が確認出来ます。

ここで注目すべきは鞍部村主司馬達等ですが、鞍部村主は『新撰姓氏録』逸文に掲載の村主姓30氏の1つである鞍作村主と同一とみられており、この人物は応神朝に朝鮮半島から渡来した阿智王の子孫の東漢氏の管轄下に置かれていた渡来人であり、馬の鞍や仏像などを作っていた技能者であろうと思われ、ヤマト王権が認めたウジが鞍部であり、カバネ（姓）が村主です。

その後裔が鞍作鳥であり、推古紀13年4月条に元興寺の銅造と刺繍の一丈六尺の仏各1体の造仏を鞍作鳥に命じていることから、釈迦三尊像光背銘の仏師止利とは鞍作鳥のことであり、法隆寺の釈迦三尊像の製作にもかかわっていたと思われます。

従って、関係するウジは鞍部や鞍作であり、ウジを司馬鞍とする釈迦三尊像光背の銘文は不思議です。

### 3. 『元興寺縁起』では

『元興寺縁起』にはその造塔に関して4人の人名が記されており、その中の一人として「鞍部首名加羅爾」の名前があり、ウジは鞍部です。

この加羅爾のカバネが首であることから、鞍作鳥（止利）の上位者であった可能性が考えられます。

### 4. 雄略紀の鞍部氏

雄略紀7年条に「**天皇詔大伴大連室屋、命東漢直掬、以新漢陶部高貴・鞍部堅貴・畫部**

因斯羅我・錦部定安那錦・譯語卯安那等、遷居于上桃原・下桃原・眞神原三所。」とあるので、新漢とは東漢氏らより後に渡来した人たちで、この中に鞍部堅貴なる人物がいたということです。

これらのウジに、陶、鞍、画、錦、訳語（＝通訳）の語が使われていることから、特殊な技能を持った人たちです。

従って、敏達紀の鞍部村主司馬達等より以前に鞍部堅貴が鞍などの製作を主導していたのでしょう。

新漢の彼らが転居したのが上桃原・下桃原・眞神原とのことですが、桃原とは推古紀34年5月条に馬子大臣を桃原墓に葬ったとの記事があるので石舞台古墳の近くにあった地名と思われ、眞神原とは崇峻紀元年条に法興寺を建立した場所を飛鳥の眞神原としているので、法興寺の周辺だったのでしょう。

## 5. 『元亨釈書』では

鎌倉時代の仏教通史である『元亨釈書』巻第十七、願雑十之二、王臣二では「司馬達等」の名前がみえますが、これは「司馬」がウジであると誤解した結果の表記と判断されます。

日本における「司馬」とは、国司の判官である「掾」の唐名の「司馬」が私的に使われていた可能性があります。時期的には律令制下の平安時代以降のことと思われます。

## 6. 法興年号について

この銘文の冒頭に古代の私年号と思われる「法興」が使われていますが、これは仏教的色彩が濃いものであり、後世の仏教関係者によって仮託された架空の年号であるとみられることから、銘文は平安時代以降に刻まれたものであると推測されます。

『釈日本紀』の「幸于伊予温湯宮」の項では、「伊予国風土記曰」に始まり、その後、「碑文記云 法興六年十月歳在丙辰我法王大王」と文章が続くので、法興の年号は碑文記からの引用であり、伊予国風土記からのものではありません。

碑文記という書名からして中世的であり、とても風土記以前に碑文記が完成していたとは信じられません。

また「東海の古代」第241号で筆者が取り上げた「聖徳太子御書並如来御返翰」にも法興年号が使われていますが、ここでの結論は年号以前の問題として聖徳太子と同時代の史料ではないことであり、法興の年号をもって歴史を論ずることは出来ないと考えます。

## 7. まとめ

法隆寺釈迦三尊像光背銘の「司馬鞍首止利」については、ウジ・カバネに錯誤がみられ、とても推古朝の銘文とは思われません。

これは鞍作氏の系譜が残っていなかったため、後世の人が鳥（止利）のフルネームを想像し、また止利の祖父の名である司馬達等のウジを「司馬」と誤解した結果ではないかと思われる。

## 鉄仏と東海地方の鋳物師

一宮市 畑田 寿一

金属を扱う職人は古来から特殊技能者として厚く保護され、その技術は代々秘伝とされてきた。その実態については、中世以降はある程度、専門とする家系の資料から判明しているが、古代については殆ど明らかになっていない。今回は鉄で鋳造された仏像を通してそれらについて考察を試みたい。

## 1 鉄製品の製造技術者

鉄器の生産は大きく分けて3種類の専門分野に分かれる。

- ① 製鉄 鉄鉱石や砂鉄から鉄の素材を取り出す工程で、採掘から精錬までの工程が含まれる。
- ② 鍛造 鉄を叩いて練り、炭素の量の違う鉄を張り合わせ、焼き入れにより、目的とする硬さと粘りを持つ鉄器を製造する。
- ③ 鋳造 溶かした鉄を型に流し込み、目的とする形の鉄器を製造する。

一般に耐久性を必要とするものは鍛造技術で製品を造り、複雑な形状が必要なものは鋳造技術を使ってきた。前者の技術者を「鍛冶師」と呼び、後者を「鋳物師」と呼んでいる。しかし、必ずしも厳密に分業していた訳ではない。

最近の研究では、これらの技術者は一定の地に定住する者と需要に応じて渡り歩く者が存在していた。

## 2 東海地方の鉄仏

仏像は通説では538年に朝鮮半島から伝来し、最初は青銅で造られていたが、その後、乾漆造や木造が現れ、13世紀頃には鉄造のものが現れた。

東海地方は鉄仏の残存件数が多い地方であるが、特に尾張地方には12体が現存する。

鉄仏像・寺名	住 所	鋳造年代
地藏菩薩立像・全久寺	南知多町内海	鎌倉・室町時代
地藏菩薩立像・釜地藏寺	愛西市根高町	1653年
地藏菩薩立像・長光寺	稲沢市六角堂	1235年
地藏菩薩立像・法蔵寺	あま市美和町	1230年
地藏菩薩立像・常観寺	江南市小折	鎌倉中期
地藏菩薩立像・長松寺	丹羽郡大口町	室町時代
地藏菩薩立像・全昌寺	北名古屋市井瀬木	室町中期
干手観音菩薩立像・江岩寺	小牧市大字大山	室町時代
地藏菩薩坐像（一部）・地藏院	名古屋市南区呼続	鎌倉時代
地藏菩薩立像・青大悲寺	名古屋市熱田区旗屋	1509年
地藏菩薩立像1・観聴寺	名古屋市熱田区金山	1531年
地藏菩薩立像2・観聴寺	名古屋市熱田区金山	室町時代
地藏菩薩立像（滅失）・功德院	名古屋市中区上前津	1555年

鉄仏は民間信仰に根付いており、壊れた鍋や釜を寄進させて鉄仏を鋳造した。この時、お賽銭の銅貨を含めて鋳造したので、鉄仏には銅成分が検出される。銅成分は錆びの防止や肌の黒色化に役立ち、仏像が長く保存される結果となった。

## 3 金山彦命を祀る神社

金山彦神と金山姫神はイザナミ命が生んだ一対の神で、鉾山の神として島根の安来、宮城の金華山、京都などに祀られているが、総本山は三重の南宮大社である。愛知、岐阜、三重には南宮大社の流れを汲む神社が21社あり、その中でも今回の鉄仏に関係が深い神社は、名古屋市熱田区金山町にある「金山神社」であろう。創建は9世紀中頃とされており、神宮鍛冶の尾崎善光が寄進したものとされている。その後、この地は刀の鐔の産地となり栄えた。恐らく鉄仏もここで生産され、尾張各地に広まったのでは無かろうか。この地で鉄物の鋳造が盛んになった理由は、鋳物の型取りに必要な良質な砂の産出によるものと考えられている。

#### 4 水野太郎左衛門家

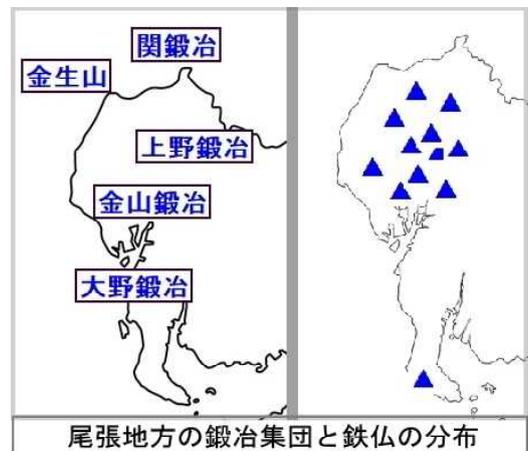
戦国時代以降、京都の真継家が全国の鋳物師を束ねるようになったが、尾張だけは尾張徳川家の威信により水野家が行った。水野家は現在でも金属商「鍋屋」として存続している。「鍋屋」は、現在は名古屋城の南東のビジネス街に位置するが、上野金屋鋳物集団と考えられており、出身地は春日井市上野であった。この付近には鍛冶・精練を窺う地名も沢山残されており鍛冶産業の盛んな地であった。

#### 5 関の鍛冶師

関の刃物の始まりは2説あり、大垣市付近で始まった鍛冶産業が関に移ったとする説と、出雲付近から鍛冶師が移り住み始まったとする説に分かれる。いずれも13世紀の源平の戦いの頃を起源とするが、大垣市の赤坂には鉄鉱石を産出していた金生山があり、その鉄鉱石を原料とした4世紀頃の鉄器が存在することから鉄の野関わりの起源はもっと遡る可能性がある。

#### 6 大野の黒鍛衆

鍛一丁で土木事業、新田開発などを行っていた知多半島の黒鍛衆は鍛冶・製鉄にも関係が深かった。常滑市と知多市の境を流れる矢田川流域は大野鍛冶と呼ばれる技術集団が存在し、近隣の阿久比町には現在でも焼き入れ専門業者が集中している。通説では12世紀頃に近江国から技術者が移り住んだのが始まりとされているが、船鍛冶の歴史から、下地は古くから存在したと思われる。



#### 7 まとめ

鉄仏の大半が地藏菩薩像であることには着目する必要がある。地藏菩薩は庶民救済、特に子供を守るとされて、道祖神と結びついて辻角に祀られてきた。浄土信仰が盛んな尾張地方では地方の有力者が信者の壊れた鍋釜を材料に村の守り神を寄進し、これが丁重に現在まで引き繋がれてきた。

鉄仏をみると湯回りに失敗して掛け継いだ部分もみられるが、衣の質感も出しており、高度な技術が使われていることが分かる。通説では尾張の鍛冶・鋳物師は外からの流入者とされているが、鍛冶の歴史は古く、上質な土や炭を基に産業基盤があった場所に新たな技術が導入されたと考えるのが妥当であろう。

尾張地方の製鉄遺跡は、西山遺跡（名神小牧ジャンクション付近）など数か所しか確認されていないが、5世紀頃の鍬や甲冑の出土からみて、多くの鉄器が使用されてきた。現在はこれらを全て流入品と考えているが、相当量は地元で造られたと思われる。この分野の研究の今後に期待したい。

### 『隋書』倭国伝のタリシホコ（1）

瀬戸市 林 研心

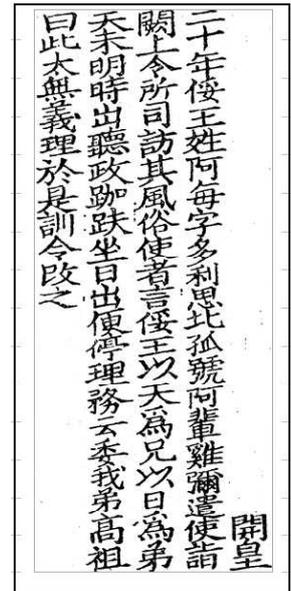
はじめに

『隋書』倭国伝に、開皇二十年倭王 **多利思比孤** が使者を派遣して隋に詣ったときの高祖（文帝）の言動が掲載されている。（画像1参照）

倭王の名称に2説（「多利思比孤」説、「多利思北孤」説）があるが、「多利思北孤」説

とする論拠を見いだしたので発表する。

画像 1



・画像 1 出典

- ① 百衲本二十四史『隋書』(元大徳刊本)<sup>\*1</sup> 831頁  
第四十六卷 列伝卷第四十六 東夷(倭国)
- ② 同影印が岩波文庫『新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書・倭国  
伝・隋書 倭国伝—中国正史日本伝(1)』<sup>\*2</sup>129頁に掲載されている。  
(附録 原文(影印)『隋書』倭国伝)

## 1 「多利思比孤」説

(1) 原文は「多利思比孤」の誤りであると解釈した論考。

- ① 石原道博：岩波文庫『新訂 魏志倭人伝・他三篇—中国正史  
日本伝(1)—』67頁

開皇二十年、倭王あり、姓は阿每、字は<sup>あめ</sup>多利思比孤、阿輩雞弥と号す。  
使いを使わして闕に詣る

注解 (3) ダリシヒコ(足彦、帯彦)か。

第一、これは男性のよびかたで女帝の推古天皇(豊御食炊屋姫トヨミケカシキヤヒメ)の音をうつしたと思われぬから、つぎの舒明天皇(息長足日広額オキナガタラシヒヒロムカ)と混同した。

第二、この時の使者を小野妹子とし、その出自は孝昭天皇の皇子天帯彦国押人命(アメノタリシヒコクニオシノミコト)であるから、これと混同した。

私見では天皇の諱に足彦というのが多いから、阿每・多利思比孤は天足彦で一般天皇の称号であろう。

- ② 直木孝次郎『日本の歴史 2 (古代国家の成立)』<sup>\*3</sup>64頁「聖徳太子と蘇我馬子」条

厩戸皇子の立太子と推古天皇の補佐、すなわち朝政への正式参与は、おそくとも六〇〇年〔推古八〕までに実現したと考えられる。『日本書紀』にはみえないが、『隋書』によると、この年、倭国の使者が隋にいており、隋の役人の質問にたいして、倭王は姓は阿每(天)、名は多利思比孤〔<sup>たらしひこ</sup>帯彦・<sup>だらしひこ</sup>足彦〕と答えている。オキナガタラシヒヒロムカ〔息長足日広額〕が舒明天皇の称号、アメトヨタカライカシヒタラシヒメ(天豊財重日足姫)が皇極天皇の称号であることから、タラシ(帯・足)は天皇を意味する語と考えられる。またヒコ(彦)は男性を意味する語であるから、タラ(リ)シヒコは男性の天皇のことであって、推古天皇をさす語ではありえない。したがって皇太子である厩戸皇子のことと解してよからう。

皇太子のことを日並皇子(日すなわち天皇にならぶ尊い人)と称するように、天皇に準ずる地位にあるのだから、立太子した厩戸皇子をタリシヒコと称しても不思議はないし、天皇のことをオオタラシ(大帯)、皇太子のことをワカタラシ(若帯)と称することもあったかもしれない。日本の使者がワカをはぶいてタラシヒコと答えたとも考えられる。

(2) 原文は「多利思北孤」であるが、本来は「多利思比孤」であると解釈した論考。

- ① 山尾幸久：東洋文庫264『東アジア民族史—正史東夷伝—』1<sup>\*4</sup>、322頁  
〔隋の高祖文帝の〕開皇二十年(六〇〇)、〔時の〕倭王は、姓は阿每、<sup>あま</sup>字は<sup>あぎな</sup>多利思比孤<sup>たりしひこ</sup>であ

\*1 百衲本二十四史『隋書』(元大徳刊本)：臺灣商務印書館、中華民國26年1月

\*2 岩波文庫『新訂 魏志倭人伝他』：編訳者：石原道博、1985年5月新訂版、1951年11月初版

\*3 『日本の歴史2』：直木孝次郎著、昭和40年3月、中央公論社

\*4 東洋文庫264『東アジア民族史—正史東夷伝—』1：井上秀雄他訳注(『隋書』倭国伝：訳注山尾幸久)、平凡社、昭和49年12月13日)

り、〔国では〕阿<sup>おほきみ</sup>鞏<sup>いた</sup>鷄<sup>み</sup>弥と称しているが、使者を派遣し〔隋の〕朝廷に詣った。

注六 「比孤」を原文は「北孤」に作るが、『北史』『通典』により改める。

「阿鞏」の隋・唐音は・a-pueiのように推定され、日本語音節 o-fo か a-fo 写したものであろう。

「オホキミ・アマ・タリシヒコ」は、中国風に姓・字・号に分けられているが、当時の天皇の称号か。『通典』などには「華言天兒也」（中国語でいえば「天帝のこども」）とある。

② 中華書局版 百衲本二十四史『隋書』の校勘記（1826・1830頁）

開皇二十年，倭王姓阿每，字多利思比孤，號阿鞏雞彌，遣使詣闕。

校勘記〔一二〕多利思比孤：「比」原作「北」、據北史倭国傳、通典一八五、通鑑大業四年改。下同。

## 2 「多利思北孤」説

(1) 原文どおり「多利思北孤」と解釈した論考。

① 古田武彦：『失われた九州王朝』\*1247頁「北」と「比」条

第三の問題は「多利思北孤」の字面だ。先の議論で示されたように、これまでの学者は「タリシヒコ」として論じている。すなわち、「多利思比孤」というわけだ。

ところが、百衲本二十四史（元、太徳刊本）を見ておどろいた。そこには「多利思北孤」とある。同版本中の、他の「北」や「比」とくらべてみたが、明らかに「北」だ。「比」ではない。だから、これは「タリシホコ」であって「タリシヒコ」ではない。

つまり、従来の学説はその史料上の根本において、何の吟味も行なわずに、重大な「すりかえ」を行っていたのである（中国側で「多利思比孤」と記したのは、『北史』である。この北史は『隋書』にもとづいて「意改」を加えたものだ。史料のオリジナリティ（原初性）はない〔『邪馬台国』はなかった』八四ページ参照〕。

『古事記』『日本書紀』につぎの記がある。

(1) 又昔、新羅の国主の子有りき。名は天之日矛と謂ひき。 (応神記)

(2) 朕聞く、新羅の王子、天之日槍、初めて来し時に…… (垂仁紀)

この「天日矛」と同じく、この倭王は「天足矛」と称しているのである。このような名称は天皇家にはない（姓は「阿每」、字は「多利思北孤」）。

これに対して「筑紫銚」の名の高い、筑紫の王者には、もっともふさわしい名なのである。

なお、筆者は、『隋書』列伝第46～49（東夷、西域、南蛮、北狄）の「北、背」及び「比、皆、毘」文字を全て拾い出し、その字体を確認したところ画像2のとおりであった。\*2

画像2

北	東北	南北	背
比	比丘比	皆皆	毘

※

「北」は横棒線が縦棒線を切断するが、  
「比」はそうでない。

\*1 『失われた九州王朝』：①古田武彦・古代史コレクション2（2010年2月、ミネルヴァ書房）。

②初版：昭和48年8月、朝日新聞社

③石原道博・直木孝次郎批判：244～247頁参照

\*2 「東海の古代」97号（平成20年7月）林 伸禧著「『隋書』倭国伝の倭王について」参照

### 3 私見

#### (1) ”タリシホコ”と掲載された理由

① 『隋書』倭国伝には、

**開皇二十年 倭王姓阿每 字多利思北孤 號阿輩雞彌 遣使詣闕。**

とあり、開皇二十年（600年）、倭王は使者を隋の高祖に派遣した。

これは、南朝・梁の武帝が即位（502年）したときに、

**天監元年夏四月丙寅 高祖即皇帝位 ……**

**戊辰 鎮東大將軍倭王武 進號征東大將軍**

とあり、倭王武が征東大將軍に進号記事以来約100年ぶりのことである。

② 使者は、隋の役人に対して「国名、国王、使者名、詣でた目的」を述べていると思う。

③ 高祖は使者と接見する場合、事前に国名・国王名及び使者名を臣下から直接聞かされていたと思う。また、使者も高祖の面前で「倭国王の名称（多利思北孤）」を述べたと推定している。

つまり、「タイコクオウ アメのタリシホコ」と述べていたと考える。

④ 接見の状況を記述している官職が存在している。

『大漢和辞典』巻10（836頁）【起居注】条に

**【起居注】官名。天子の左右に在って其の言行を記すことを掌る。**

**即ち、周の左史・右史の職。漢代は宮中の女史之に任じ、魏晋には職のみあって官無く、後魏始めて起居令史を置く。**

**隋唐宋に至り、起居郎・起居舎人を置いて、其の職を分掌せしめ、明初は起居注を設け後裁革し、翰林院に属す。清には起居注官といひ、翰林を以て兼ねしめた。**

また、隋時代の官名「起居舎人」を解説している。

**【起居舎人】官名。隋置く。起居注を見よ。**

⑤ 記録する官職が存在したため、煬帝が大業3年のタリシホコの国書について怒った事が記録として残っていたのである。

#### (2) 「アメのタリシホコ」の漢字名

① 「アメのタリシホコ」を漢字で書くとどのようなか、筆者は「大倭国 天帶鉾」と考えている。

② 「多利思北孤」と掲載されているのは、次の理由と推定している。

ア 煬帝は、倭王の国書の内容に怒っていた。それ故、煬帝が「<sup>タキ</sup>大倭国」を「<sup>タイ</sup>\*1倭国（弱い国）」と卑しんで呼ばしたと推定する。

イ 『隋書』を作成した魏徵は、煬帝の意を体して卑しんだ表記とした。

・アメ：「天」という字を避けて「阿每」とした

・ホコ：「北」は、天子は南面し、臣下は北面する事から臣下の位置づけした。

「孤」は、「みなしご、いやしい」の意味をもたした。

・詳しくは、次表を参照されたい。

\*1倭：『大漢和辞典』では「弱い」の意味

表 『大和漢和辞典』(阿・毎・多・利・思・北・孤)における意味(用例等を除く)

辭	字音	意	味	掲載頁
阿	アツ アチ	①をか。大きい丘。②くま。まがったところ。③さか。④ふもと。⑤きし。 ⑥かたよる。⑦ななめ。⑧まがる。⑨おもねる。まげてしたがう。⑩むね。 ⑪ひさし。のき。⑫よる。⑬ちかい。⑭うすぎぬ。⑮うば。⑯えだの長く美しいさま。 ⑰ゆるく應ずること。⑱この。あの。 ⑲やはらかなさま		巻11 798頁
毎	バイ マイ	①つねに。②ごとに。③すべて。④おのおの。⑤しばしば。しきり⑥あたる。 ⑦いへども。⑧しげる。⑨田の美しいさま。⑩をかす。むさぼる。⑪くらい。おろか。 ⑫をさない。ちひさい。		巻6 795・ 796頁
多	タ	①おほい。おほく。②ひろい。ひろく。③かさなる。④あつい。あつく。 ⑤おほきい。⑥まさる。⑦おほくなる。⑧あまる。あまり。⑨おほくする。 ⑩多とする。⑪いさを。軍功。⑫ただ。		巻3 342頁
利	リ	①とし。①するどい。するどくする。㊦すばやい。②とほす。とほる。とどこほ りない。③かなふ。調和する。④萬物をして生を遂げしめる徳。 ⑤よい。よろしい。⑥都合がよい。便宜。⑦なめらか。⑧よくする。作る。 ⑨むさぼる。⑩もとめる。とる。⑪よろこぶ。⑫さいはひ。とく。⑬益する。 ⑭とみ。ゆたか。⑮まうけ。⑯たくみ。⑰はたらき。巧用。⑱かため。要害。 ⑲いきほひ。⑳かち。㉑ やしなふ。㉒ 利子		巻2 242・ 243頁
思	シ	①おもふ。①おもひめぐらす。はかる。かんがへる。もと■に作る。㊦ねがふ。 のぞむ。②したふ。こがれる。③あはれむ。いつくしむ。④悲しむ。憂へる。 ⑤于思は、ひげの多いさま。⑥助辞。 ①おもひ。おもんばかり。こころ。意思。②道徳が純一で皆備はる。		巻4 994・ 995頁
北	ホク ハイ	①きた。方位の一。南(2-2750)の対。子の方向。陰に屬し、易では坎に配し、五 行で水にあたる。②きたする。北方へ行く。 ③そむく。④にげる。はしる。敗走する。⑤わける。⑥かくれる。 ①そむく。そむける。わける。		巻2 442頁
孤	コ ク	①みなしご。①父の死んだ子。㊦親の死んだ子。㊧国事に勤めて死亡したもの の子。②みなしごにする。③ひとりもの。縁りのないもの。 ④ひとつ。ひとり。ひとりだち。助けがない。⑤王侯の謙称。⑥官の三公に次ぐ者。 ⑦さかる。とほざける。⑧いやしい。おろか。⑨そむく。⑩すてる。罪する。		巻3 850頁

※・初版 : 昭和30年11月。(著者)諸橋轍次。大修館書店

・修正版 : 昭和61年7月。(修訂者)鎌田正、米山寅太郎。大修館書店。

### 前回の例会の話題

- ・ 広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像の出自  
刈谷市 酒井 誠
- ・ 尾張地方に於ける須恵器の歴史  
一宮市 畑田寿一
- ・ 舶載か仿製か  
名古屋市 石田泉城

### 例会の予定

#### ■ 例会の予定

- 1 日時 1月21日(土)13時半～
  - 2 場所 名古屋市市政資料館
- 来月以降の例会  
2/18(土)、3/18(土)

### 会員の投稿について

- 会報誌への投稿 (編集担当: 石田)  
toukaikodai@yahoo.co.jp

■ 投稿締切り日 1月31日(土)

■ 投稿文の文字など

原則として原稿はベタ打ちにしてインデントなどを設けないようにしてください。

タイトル: 18P イトMSゴシック・強調

見出し1, 2, 3: 12P イトMSゴシック

見出しは強調しない

小見出し(1)(2): 12P イト明朝体・強調

本文・引用文: 12P イト明朝体

写真・グラフ: 細かすぎず明瞭なもの。

で印刷しますが、全て12P明朝体で結構です。